

土木広報センター

土木広報センターは、土木広報戦略会議の基本方針に基づき、自らが主体となる活動の実施（「土木の日」の活動を含む）、各委員会や支部、関係団体が主体となつて行う活動との連携・調整、情報共有・発信などを行うことを目的とする。

令和四年度 土木の日および くらしと土木の週間 報告

令和四年度の「土木の日」および「くらしと土木の週間」は、全国規模で関連行事が企画・実施され、盛会のうちに終了しましたことをここに報告申し上げます。

本年度も、新型コロナウイルス感染症の防止対策に努め、各地で工夫を試みながら実施いたしました。

1987年11月18日に「土木の日」を制定してから、2022年11月18日で35周年を迎えました。各支部や各関係団体の多大なご協力を賜り、「土木の日」が全国的に浸透してまいりました。土木広報センターとしても、一般の方々に社会資本の重要性を認識していただけるよう継続していく所存です。今後とも本行事に関しまして、多くの方々のご理解

本部

土木コレクション2022

土木コレクションでは、土木界が保有する歴史的資料や図面、写真など、普段目にすることができない各種コレクションを展示、公開している。本年度は、3年の充電期間を経て、JR新宿駅西口にある新宿駅西口広場イベントコーナー

やご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。また、ご尽力いただきました多くの皆さま方に心からお礼申し上げます。

で、11月22日（火）から25日（金）までの対面開催とし、約2万2000人にご来場いただいた。コロナ禍での開催となるため「密閉」「密着」「密接」を避けるようにレイアウトを考え、各コンテンツの展示、公開することとした。

コンテンツとして、一つ目は「流域治水」である。近年、豪雨災害が激甚化し、国土交通省は水害対策を大きく転換する「流域治水」を2020年に打ち出した。川に流れ込むまでの「流域」やあふれた場合の「氾濫域」を含めて対策を行う画期的な取り組みである。なぜ「流域治水」のような治水思想を掲げるに至っ

たのか？単に雨が強くなったというだけでなく、これまでの治水の歴史も大きくかわっている。流域治水の解説だけでなく、私たちがどのように川と付き合ってきたかを振り返り、代表的なプロジェクトについて、図面や写真、映像などで詳しく解説した。

二つ目は首都圏の移動に欠かせない公共交通機関の「鉄道」と「道路」に焦点を当て、事業展示を行った。鉄道は、1872（明治5）年に日本で最初に新橋―横浜間で開業してから150年の節目を迎えるとともに、国鉄分割民営化から35年となる節目の年である。文明開



今井副会長（コミュニケーション部門主査理事）によるオープニング挨拶（ビデオ）



各コンテンツを鑑賞する人たち

化の象徴として走り始めた鉄道は日本の経済社会の発展を支える存在となった。東北新幹線建設や東京駅改良のような過去の大規模工事から、渋谷駅改良などの近年におけるビッグプロジェクト、2022年2月に発災した福島県沖地震からの復旧などの映像を通じて、鉄道駅、橋梁・高架橋の歴史を感じてもらえるように貴重な映像や図面、写真などで紹介した。また、道路は、首都高が1962年12月20日、京橋―芝浦間の4・5kmで最初に開通してから60年を迎える年である。総延長327・2kmまでネットワークが広がり、首都圏の暮らしや社会経済活動を支えるインフラとして、一日約100万台の車が利用している。初めて首都高が開通した際の工事映像から歴史を感じていただくとともに、これからも首都高が社会に貢献し続けていくためのさまざまな取り組みについて貴重な映像や図面、写真などで紹介した。また、今回は2022年11月18日「土木の日」にリユニアルオープンした「歴史的鋼橋検索Webサイト」のPRのために作成された道路橋と鉄道橋それぞれの専門家がベストな橋を推薦する「歴史的鋼橋 鉄の橋No1決定戦」の映像も流した。

また、本年度の土木コレクションもこれまでと同様、東京都建設局との共催で、「東京橋と土木展（東京都建設局主催）」と同時開催とし、「東京橋と土木展」では建設局が所有する貴重な図面や写真、日野橋や勝鬨橋の模型などの展示を行った。

会場のデザインについては、これまで通り黄色をメインカラーとして大型のファサード、受付スタッフ着用のヘルメットやユニフォーム、アンケート回答者へのプレゼントなどを考え、「土木」をモチーフにした印象的なデザインを軸に会場全体の統一感を意識した。小学生の親子連れからお年寄りまで幅広い年代の方々に足を運んでいただき、通りすがりに興味をひかれて来場したという方も多くいた。さらに、プレゼント配布時にまわしていただくカプセルトイを一新するとともに、電池で動く鉄道玩具を模型の上で走らせるなどのユニークな仕掛けにも関心が集まった。

今後も土木コレクションで収集したコンテンツのもつ魅力を生かしつつ、一般の方々に土木に対する理解を深めていただけるような企画を展開していきたい。



「土木」をモチーフにした印象的なデザイン



受付周りのユニークな仕掛け



上田会長が来場されました



スタッフの集合写真

北海道支部

北海道支部では札幌、北見、苫小牧、室蘭、函館において、関係機関の協力のもとに「土木の日」関連行事を実施し、土木のイメージアップに努め、多くの参加者から好評を得た。

特に札幌では11月17・18日には北海道土木技術会「土木の日パネル展2022」と同時開催の「イブニングシアター」を札幌駅前通地下歩行空間にて開催し150人ほどの観覧者が青函トンネル等の映像を楽しんだ。

また、11月18日には、「グローバルに振り返る日本の土木」と題した「土木の日」記念講演会および選奨土木遺産認定書授



講演会風景

賞式が、土木学会関係者などの参加により3年ぶりに札幌市内のホテルで対面開催された。

記念講演会

では、JICAシニアアドバ



授賞式風景

イザー馬場仁志様より、国際性をキーワードにテーマを設定いただき、国土交通行政および技術の現場経験をもとに長きにわたって途上国支援に活躍してきた国際活動の中で感じた文化の違いや、自然や土木に対する概念の差などに対する気づきや驚きをご紹介いただくとともに、そのうえで再認識してきた日本の文化に根ざした土木の素晴らしさや誇るべき遺産についてご講演いただいた。

選奨土木遺産認定書授賞式では、新たに認定を受けた「室蘭港湾施設群（室蘭市）」、「標津橋（標津町）」および「旧茂喜登牛水路橋（足寄町）」について、認定書と銘板の授与が行われた後、管理者である室蘭開発建設部、釧路開発建設部および電源開発（株）の代表者がそれぞれの土木遺産の概要報告を行った。

東北支部

東北支部では、「土木の日」関連特別行事の一環として、防災に関するシンポジウムをハイブリッド形式で開催しました。

本年度は、東北管内でも近年、豪雨による洪水被害が頻発していることから、気候変動によって近年の豪雨はどのように変化してきているのか、またこのような降雨の変化に対応するこれからの洪水対策のあり方等をテーマに、東北地方整備局河川部長 板屋英治様と仙台管区気象台気象防災部 気候変動・海洋情報調査官 福島秀明氏のお二人に特別講演をお願いしました。板屋河川部長からは「令和4年の水害の概況と今後の対応について」と題して、東北地方で発生した水害

の状況とこれらが年々激甚化しているというところ、そして、このような気象状況下では「流域治水協議会」における市民の連携が防災、減災に重要な役割を果た



防災に関するシンポジウム

すというお話を、福島気候変動・海洋情報調整官からは「気候変動に伴う大雨等のリスク増大とその適応について」と題し、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第6次報告書では、人間が世界の温暖化に影響を及ぼしたと断定したという報告がされたということを踏まえ、気候の将来予測や防災気象情報および治水対策というソフトとハードの整備が今後重要であるというお話を頂きました。

パネルディスカッションでは、東北大学風間聡教授をコーディネーターに、特別講演のお二人と、東北電力（株）再生可能エネルギーカンパニー水力部副部長 内藤英徳氏、福島大学川越清樹教授の4人のパネリストで行い、内藤副部長からは、水力発電所の水害被害と対策事例のご紹介等を、川越教授からは「持続可能でしなやかな流域治水の実践に向けた検討について」と題し、流域治水や水田、公園、学校等のくぼ地を利用した治水対策等についてのお話を、産学官の

それぞれの専門的なお立場から、地域防災、流域治水などに関する貴重なご意見を頂きました。参加者を含め質疑応答が展開され、参加者には土木に関する関心が高められた機会となりました。

関東支部

関東支部では、関係機関の協力のもとに「土木の日」の関連行事を実施した。

3年ぶりに現場見学会・親子見学会を人数制限で開催した。現場見学会は、誰もが快適に移動できる公共交通ネットワークの構築を目的として整備される「芳賀・宇都宮LRT」へ、また、土木技術のすばらしさを子どもたちに紹介するための親子見学会では、「高速横浜環状南線 公田笠間トンネル工事」、「高速横浜環状南線 栄IC・JCT橋梁上下部工事」へ見学を実施した。VR・ARの体験もでき、子どもたちは熱中していた。どちらも沢山の応募者があり、抽選で選ばれた参加者には高評価をいただいた。



「親子見学会」質問タイム



「親子見学会」VR体験

本年度も会員交流促進の一環として「土木のある風景」写真コンテストを「土木の日」11

月18日より募集を開始した。関東支部幹事により選ばれた優秀作品は、3月の関東支部技術研究発表会で会場展示し、ご来場の方からの投票で最優秀賞・優秀賞・佳作が決定される。入賞作品は、カレンダーおよびHPに掲載される。

また、東京都土木技術支援・育成センター・三井住友建設(株)技術研究所・(株)奥村組技術研究所・(株)フジタ技術センター・東洋建設(株)三浦研究所・(株)大林組技術研究所にご協力いただき「技術研究所見学会」を実施し、近所の小学校の児童に建設業の役割や新技術開発の取り組みなど、土木技術に触れて楽しい時間を共有した。

関東支部には、新潟・山梨・群馬・栃木・茨城の五つの分会があり、各分会において記念講演会(動画放映含む)、土木遺産の見学会など各種イベントを実施し、土木工学のイメージアップと市民生活との関係の周知に活発に取り組んでいる。



入賞作品カレンダー

中部支部

中部支部では、関係機関の協力をいただき、「土木の日」ポスターを作成し、関連行事を10月から11月にかけて実施した。

昨年度中止となった「市民見学会」「親子ふれあい見学会」を、令和4年度はコロナ感染対策を考慮して募集定員を減らし、消毒など感染対策を実施したうえで開催した。これらの見学会は土木に対する一般市民の関心を高め、親しみを持ってもらい、土木施設の役割や必要性を理解してもらうことを目的に開催しており、「市民見学会」では、長野県でダム施設や橋梁建設工事の見学、「親子ふれあい見学会」では、岐阜県で県道の4車線化工事、砂防堰堤やダムの建設という普段見ることのできない現場を見ていただく。



市民見学会(長野県橋梁建設現場)



親子ふれあい見学会(岐阜県 砂防堰堤建設現場)

き、両見学会で幅広い年代の方々34人が参加された。見学会参加者のアンケート結果では、「貴重な体験ができた、大変良い企画だった等」の感想やご意見を頂き、土木への関心を高めることができたところである。

中部支部では、このほかに中部地方の大学・高専の土木系学生に土木事業の魅力を伝えるとともに、将来的に土木技術者を目指す学生の支援として「土木技術者と学生の交流会」、教職員、教員を目指す学生および理工系の学生の団体を対象とした「エクスカーション(体験型見学会)」の開催、さらには生涯学習の場等に講師を派遣する「出前講座」や「選奨土木遺産のパネル展示」等を行い、土木および土木学会の認知度向上とともに、将来の担い手の育成に努めている。

関西支部

関西支部では、「土木の日」および「くらしと土木の週間」の活動として、「土木の日」関連行事関西地区連絡会の主催で、さまざまな企画（連絡会行事）を実施した。

「土木の日」ポスター制作では、「土木が支えるみんなのくらし」まち・道・鉄道・港・エネルギー」のテーマでポスター募集したところ、計249作品（子供部門123作品、一般部門126作品）と多くの応募があった。選考の結果、中井愛奈さん（大阪府立工業高等学校）の作品が最優秀賞となり、土木の日関連行事の広報ポスターに活用した。また、日本マレーシア協会を通じて、海外からの応募もあった。

「土木の日」コア行事のFCCフォー



2022年度「土木の日」ポスター

盛況のうちに終了した。全国大会開催中には、鴨川やそれに架かる橋梁を散策しながら見学するエクスカーショントアー「鴨川ドボク巡り」どぼくカフェと土木広報のあり方実践編」を実施した。

中国支部

令和4年7月16日、海田町（広島県）の小学生とその保護者38人が参加して「夏休み親子見学会」が開催され、安芸郡海田町の東広島・安芸バイパス整備事業の工事現場を見学しました。バスで高架橋へ上がり、工事概要の説明を聞いた後、ドローンの操作を見学し、VR・鉄筋結束の体験をしました。参加した小学生は、デジタル化してきても人の手は必要だということを感じ、少し土木の道に進むことも考えたと話していました。最後にドローンを使って全員で記念撮影を実施しました。

また、次世代を担う子どもたちに、生活の中で何気なく見ている身近な構造物を描くことによって土木に親しみを持って

もらうことや、私たちの暮らしが土木技術に支えられていることを感じてもらうことを目的とした、第15回「身近な土木を描いてみよう！ 図画コンクール」を実施しました。中国5県から小中学生の素晴らしい作品、1420枚が寄せられ、優秀賞13点と佳作51点を選考しました。優秀賞を対象とした表彰式は、広島・鳥取、岡山と3カ所で行われ、河合研至支部長より、優秀賞者へ表彰状と優秀作品を掲載した2023年のカレンダーを贈呈しました。低学年の作品には、家族を題材にしたほのぼのとしたもの、高学年の作品には、橋やクレーンなど緻密に描かれたものもありました。今回は、過去最高の応募があり、このコンクールが定着してきているようだと、審査員をお願いしている校長先生から感想をいただきました。



土木学会「夏休み親子見学会」



第15回「身近な土木を描いてみよう！ 図画コンクール」表彰式（広島）



第15回「身近な土木を描いてみよう！ 図画コンクール」2023年カレンダー

四国支部

四国支部では、関係機関のご協力のもと「土木の日」関連行事を一般市民、小中学生・高校生等を対象に四国の各県内で10月から12月にかけて実施した。

支部行事としては、一般の方に土木に興味や関心を持ってもらう事を目的とした「近代土木遺産巡りバスツアー」を11月26日に実施した。豊稔池堰堤（観音寺市）、香川用水記念公園（三豊市）、御殿浄水場（高松市）を巡り、ボランティアガイドや職員の方から詳しい説明を受け、一般の方が立ち入れない所まで見学することができた。7歳から72歳の参加者には土木遺産の歴史的な魅力について



土木遺産巡りバスツアー（豊稔池堰堤）

関心を持っていただいたと思う。

また、11月28日から3日間、高松市において「選奨

土木遺産&土木コレクション展」を開催し、土木コレクションパネル10点、四国土木遺産パネル15点を展示し、歴史的に価値の高い図面や写真など普段目にすることができないコレクションを市民にご覧いただいた。

地区行事としては、各県において小中学生や工業高校・高専生を対象に土木・建築現場の見学会を実施した。徳島県では一般県民を対象とした「とくしま防災フェスタ2022」に参加し、液状化実験装置の実演や防災関係動画の上映を行った。

大学・高専公開行事としては、パネル展示の開催や、小中学生を対象とした科学実験等を行った。阿南高専では9月に徳島県内の橋梁を紹介する「徳島の橋かるた」48枚を昨年に引き続き製作し、各小中学校に配布しマスコミにも取り上げられた。この取組みは土木学会公益増進資金助成事業の対象となった。



四国の土木コレクション&土木遺産パネル展

西部支部

九州沖縄地域では、本年度は各地区でイベントが開催された。

福岡地区では、10月2日に国営海の中道海浜公園で「土木の日ファミリーフェスタ2022」が開催され、3000人を超える来場者で賑わった。

熊本地区では、「令和4年度絵画・写真コンクール」が開催され、入賞作品が11月14〜25日に熊本県庁1階ロビーに展示され、入賞者表彰式が熊本県庁地下大会議室で行われた。

長崎地区では、「DOVOCフェア2022」として、11月6日に佐世保市でパネル・模型展が、11月19日に長崎市で現場見学会が、11月20日に長崎大学で「土木おもしろ体験隊」が、それぞれ開催された。

DOVOCフェア2022（長崎地区）



宮崎地区では、11月26〜27日にイオンモール宮崎で「宮崎県「土木の日」パネル展」が開催された。2日間で615人の来場者があり、盛況のうちに催



沖縄の土木技術を世界に発信する会シンポジウム（沖縄地区）



土ホフェスタ in びらも〜 2022（鹿児島地区）

しを終了した。鹿児島地区では、11月19日に天文館ぴらも〜等で「土ホフェスタ in びらも〜 2022」が開催された。パネル展示、建設機械展示、砂防ダム実験等が行われ、家族連れなど延べ約3000人が体験・見学された。

沖縄地区では、11月25日にパレット市民劇場（那覇市）で、沖縄の土木技術を世界に発信する会第27回シンポジウム「本土復帰50周年と沖縄のインフラ整備について〜今後の沖縄振興50年を考える」が開催され、169人の方々が参加された。